様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520745
研究課題名（和文）　ハンガリーにおけるモハーチ敗戦をめぐる歴史的言説に関する研究

研究課題名（英文）　The historical discourses on the defeat at Mohács in Hungary

研究代表者
鈴木　広和　（SUZUKI HIROKAZU）
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：80273738

研究成果の概要（和文）：
ハンガリーがオスマン帝国に敗れたモハーチの敗戦（1526 年）に関して 16 世紀に表明されたさまざまな言説は、現代に至るまで、とりわけハンガリーの国家、国民が危機的状況に陥るごとに、想起され、新たな意味を与えられ変容しつつ継承されてきた。モハーチ敗戦をめぐる歴史的言説は歴史叙述だけでなく、文学作品や図像においても描かれ、その結果として「傷ついたハンガリー」などの自画像形成に影響を及ぼした。

研究成果の概要（英文）：
The remarks written in the 16th century on the decisive defeat of the Hungarian Kingdom at the Battle of Mohács (1526) were described again and again in Hungary up to the modern age, in particular when the Hungarian state or nation plunged into a critical situation. Naturally the remarks changed and obtained new implications according to the changing circumstances. It is remarkable that the historical discourses on the defeat at Mohács were not only described in historical writings, but also expressed in literary works and pictures, and influenced the self-image of the Hungarian nation, such as “the injured Hungary.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：中世ハンガリー王国、モハーチの戦い、「フンガリアの愁訴」、キリスト教防壁論、異教徒認識

１．研究開始当初の背景

中世ハンガリー王国と近代ハンガリー国家、さらには現在のハンガリー国家を同一の国家と見なすことに、必ずしも必然性はない、あるいは無理があるにもかかわらず、中世王国から近世、近代国家の歴史が、一つの連続する国民国家の歴史として叙述されてきた。その中でモハーチの戦いは中世王国の解体の直接的原因、国民の悲劇として記述されてきた。それは近代国家中心の歴史観によるも

のであり、中世王国をハンガリー史の枠組みと見なす、あるいは中世王国こそが本来あるべきハンガリー国家の姿であることを自明の前提とする歴史叙述の背景となっていると言える。

２．研究の目的

衝撃的な敗戦およびその後の王国解体という現実を目の当たりにした人々の言説を検証し、敗戦とその影響を国家、「国民」の悲劇ととらえる記憶や記録が、いかに近代に至るまで継承されていくかを追跡し、近代ハンガリー国民の自画像形成への影響を明らかにする。可能であれば、その検証を通して、中世王国こそがハンガリー国家の本来の姿であることを自明の前提とするに至った過程を明らかにする。

３．研究の方法

敗戦および国家解体のショックをめぐる言説の継受と変容を、狭義の歴史叙述だけでなく、広い意味での文学作品を考察の対象として追跡した。なお、当初の予定から変更して、図像資料も考察の対象に含めることにした。

考察に当たっては、重大な歴史の転換点であると考えられる 1699 年のカルロヴィツ和約、1848－49 年の革命と独立戦争、1867 年のアウスグライヒ、および 1920 年のトリアノン条約締結などに注目し、それぞれの前後でモハーチ敗戦をめぐる言説が継承されたのかどうか、あるいは継承された場合にはどのように変容したのかを調査した。

４．研究成果

モハーチ敗戦に関わる 16 世紀の言説について、次のような分類を試みた。

(1)敗戦の原因論

ハンガリー貴族の堕落（私利私欲、飲酒大食、戦場以外でのみ勇ましい、など）と無謀な勇敢さ、貴族の党派争いとそれによる国内の不一致、国王ラヨシュ 2 世と腹心の無策ないし軍事的能力の不足(国王が貴族の無謀な求めに引きずられ、勝利の見込みの低い戦いに自ら出陣して戦場で落命したことなど)、ハンガリー人の罪深さが神の怒りを買い、神が罰としてオスマン軍を送ったことなどが唱えられた。罪深さに関しては、カトリック、プロテスタント双方が互いに相手側を神の怒りの原因であると主張したことも注目されるが、これはハンガリーだけではなく、ラテンキリスト教世界の他地域でも一般的であった。

(2)敗戦に関わって表明された自己認識

キリスト教防壁論、「フンガリアの愁訴」、美しく豊かな国土などのトポスが確認された。その他にも、罪深いハンガリー人は、神により選ばれた民であるがゆえに神の罰を受けたとする一種の選民思想も見られた。

ハンガリー王国がキリスト教世界を守る盾、砦、防壁であるというキリスト教防壁論は、ハンガリー人の自意識、使命感に影響を与えた。この言説は中世からあったが（初出はピッコローミニの教皇宛て書簡)、プロテスタントは受け入れなかったし、モハーチ敗戦によりハンガリー人がキリスト教世界を守るという使命を果たせなくなったため、このトポスは意味を失い、しだいに消えていく。

他方、「フンガリアの愁訴」は、人文主義の伝統（古代の英雄叙事詩など）に基づき韻文で描かれた。ハンガリー王国を、苦しみながら「トルコ人」と戦って力尽き「トルコ人」の前に倒れた女性、あるいは「トルコ人」に敗北して囚われの身となった女性に擬人化し、（姉である）ドイツ（皇帝）に救援を求める、あるいは救援に来ないドイツを非難するといった内容である。最初に描かれたのは 1535 年であるが、作者ルビガルスの目的は、モハーチの戦いで敗れたハンガリー貴族に対するドイツ人人文主義者の批判に反論することにあった。堕落し弱くなったハンガリー貴族はキリスト教世界を守るという使命を全うできなかったという批判に対し、「ゲルマニアの愁訴」トポスを援用し、またラテンキリスト教世界で流布していた、いわゆる「トルコもの」ないし「トルコ・パンフレット」 に描かれた「残虐なトルコ兵」のイメージなどをとり込むことで、ハンガリー貴族の擁護をより効果的に訴えることを目指して書かれた作品であった。つまり「フンガリアの愁訴」は、15 世紀末から 16 世紀前半のラテンキリスト教世界、とりわけ中部ヨーロッパの文化的状況のなかでこそ生まれ得たトポスであった。ルビガルス以降も、ハンガリーの人文主義者たちはラテン語韻文などでこのトポスを描いた。他方、ドイツでも「フンガリアの愁訴」はよく知られていた。なお、プロテスタント的要素が強い作品やハンガリー語で書かれた作品には、このトポスはあまり取り入れられなかった。

美しく豊かな国土のトポスはいつの時代にも至る所に見られるが、ここでは「フンガリアの愁訴」と結びつき、フンガリアを救うべき理由の一つとして記述された。またこのトポスには、国土が美しく豊かであった敗戦以前のハンガリー王国時代に対して、敗戦後は国土が荒廃してしまったという時代上の対比を強調することで、現状の悲惨さを訴える効果もあった。

(3)戦いそのものについては、国民の悲劇あるいは不運な戦いであったとするものが多いが、一部、この敗戦は不可避ではなく、戦うとしても開戦を避けるべきであったと

する論も見られた。
注目すべきは、上記の言説がいずれも、ハンガリー王国のみならず周辺諸国でも記述されたことである。特に人文主義者はオーストリア、ドイツやイタリアなどの近隣諸国をはじめとして、ラテンキリスト教世界各地の人文主義者との間で交流があり、相互に影響を与え合っていた。また人文主義者を含め、プロテスタントに改宗した者の中には、ヴィッテンベルクなどに留学してルターやメランヒトンから多大な影響を受けて帰国した者が多かったことが共通性の背景として挙げられる。ハンガリーで書かれた著作が国外で印刷されることも多かった。

次に上記の言説が、17 世紀以降、どのように引き継がれていったのかについて、各時期の転換期の状況に注目しつつ、おおよそ下記について確認することができた。
(1)の内、罪深さに関しては 17 世紀に入ると記述が減少し、貴族の堕落も記述されなくなった。その背景には三分割状態が恒常化し、しだいにトランシルヴァニア侯国がハンガリー王国とは別個の独立した国家として認識されるようになり、敗戦の衝撃が過去のものとなったことがあると考えられる。敗戦の原因が再び大きく取り上げられるのは 19 世紀になってからである。
(2)の内、意味を喪失し消えていったキリスト教防壁論は変形して、キリスト教世界を守るためオスマン軍と戦い「傷ついたハンガリー」という自画像を形成していった。この像は「フンガリアの愁訴」にも一要素として含まれていた。「フンガリアの愁訴」そのものは、18 世紀以降、すなわち中世ハンガリー王国の領域であった地域からオスマン帝国の勢力がハプスブルク家の軍勢に追い出され、ハンガリー全体がハプスブルク家の支配下に入った後は、描かれる理由がなくなった。しかしこのトポスは、モハーチ敗戦以前の栄えある過去と現状を対比させて現状を嘆く韻文のトポスへと変容し、とりわけ反ハプスブルク的な政治的立場を表明する韻文などで描かれた。最も特徴的な韻は nép（国民、民族） – tép（引き裂く）であり、ここでも「傷ついたハンガリー」のトポスが形成された。傷ついたのはハンガリー人であると同時に、ハンガリー国家（の擬人化されたイメージ）でもあった。こうした作品の頂点の一つが 1823 年に書かれたケルチェイ・フェレンツの詩（現ハンガリー国歌）であるが、この詩には、キリスト教世界の守り手として異教徒と戦い、傷つき苦しむハンガリー人、かつて豊かであった国土というトポスが描かれた。
モハーチ敗戦を語ることが現実との関連で、再び自重大な意義を持つようになったのは 19 世紀である。とりわけ 1849 年の独立戦争敗北後に、文学作品などで、国内の分裂がモハーチ敗戦の原因であっこと述べられ、また独立戦争に敗北したハンガリーがしばしば「傷ついたハンガリー」として表象された。ただし 1840 年代にハンガリーの自由主義者はハンガリー王国とトランシルヴァニアとの統合を望んだものの、トランシルヴァニア側は必ずしも統合を望まなかった。
その後 20 世紀に入り、第一次世界大戦でオートリア＝ハンガリー二重君主国は敗北し、ハンガリーは 1920 年に締結されたトリアノン条約により、国土の 3 分の 2 と人口の 6 割を失った。この危機的状況の中で、モハーチ敗戦と現状を重ね合わせ、第一次世界大戦前の領土（これはモハーチ敗戦以前の中世ハンガリー王国の領域と重なる）の回復を求めつつ（領土修正主義）、同時に「傷ついたハンガリー」の自画像、悲劇的運命の国民のイメージが生産された。つまり多くの領土を失ったハンガリーは傷ついており、それに対し傷が完治したハンガリーとは、オーストリア＝ハンガリー二重君主国期のハンガリー、あるいは中世ハンガリー王国の姿だということが、暗黙の前提となっていた。二重君主国期の領土の形が図案としてしばしば描かれた。
以上のように国家あるいは国民の危機的状況の中で、モハーチ敗戦をめぐる歴史的言説およびその変形が、新たな意味づけを与えられつつ、ハンガリー人の自画像の形成に影響を及ぼしてきたことが確認された。他方、17 世紀のトランシルヴァニア侯国のように、王国の分裂状態が受け入れられている場合や、オーストリア＝ハンガリー二重君主国期のように比較的安定した状況においては、モハーチ敗戦をめぐる言説はあまり現実との関わりを持ち得なかったことがうかがわれた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① SUZUKI Hirokazu, Some Aspects of Descriptions of the Turks in 16th Century Hungary – Rubigallus and Dernschwam —, *Mediterrán és Balkán Fórum*, 18. szám (VII/2.), (2013), 2-6. 査独無

〔学会発表〕（計２件）
① 鈴木広和、ケーザイ・シモンの年代記とフン=ハンガリー同族説、ハンガリー学会、2013. 2. 16、大阪大学

② 鈴木広和、中近世ハンガリーをめぐる地域史論、洛北史学会、2012.6.2、京都府立大学

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　広和　(SUZUKI　HIROKAZU)
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：80273738